

# 闇を味わう文化

12 The Culture Appreciates The Darkness

—その羊羹の色あいも、あれを塗り物の菓子器に入れて、肌の色が辛うじて見分けられる暗がりへ沈めると、ひとしお瞑想的になる。人はあの冷たく滑らかなものを口中へふくむ時、あたかも室内の暗黒が一箇の甘い塊になって舌の先で融けるのを感じ、ほんとうはそう旨くない羊羹でも、味に異様な深みが添わるように思う。—

谷崎潤一郎著 「陰翳礼讃」より引用

昔の人が「見えない存在」として「黒」を文化に取り込んだのは、私達の生活が闇に親しんできたことと無縁ではないでしょう。谷崎潤一郎はその著書「陰翳礼讃」のなかで、日本人の生活全般に底通する美意識について、衣食住すべてに渡る例を挙げながら、闇と切ってもきれない関係にある日本的な美の本質を書いています。すべてを白日のもとにさらしてくっきりとわけるのではなく、暗闇のなか、境界すらあいまいな色調のなかに底知れぬ深みを感じる。この眼に見えるもの以上のなにかを感じ取る感受性が、モノの背後にある意味や価値を感じ取り、それこそを大切に思う私達の美意識の基盤となっているのではないのでしょうか。